

山でその不味といつたら口にする事も出来ない、一二泊だから我慢する考ひで、その夜穢いベットに寝ると案にたがはず自分の尤も恐怖してゐる南京先生がチクチクやらかす、これがため眠る事が出来ない、夜の明くるを待った、翌朝になると首から耳がすつかり腫れあがりて首を動かす事も出来ない、(生の體質として蟲の中毒は非常のもので皮膚を這はれたばかりで腫れあがる)こんな宿に二三泊すれば一命に係はるのだ、幸にも吾太平洋畫會の人で新井氏がこゝに留學してゐて余を訪問してくれた、氏は南ロンドン、ハンマースミススのクロープ畫室を借家してゐるので、その室は濶く二人位は居らるゝとの事で、早速この地獄宿を去つて氏と同棲する事になつた。氏は大のベヂテリアンである、自分も魚や肉はあまり好まぬ菜食家であるから早速このベヂテリアン宗に入門したのだ、こゝの畫室にはベヂテリアン多く、隣りに居る米國の畫家カーといふ男もベヂテリアンである、毎日黒パンと菜のみで生活してゐる。

倫敦に着いたら直に瑞西に行き獨逸のミュヘンで研究する最初の考ひであつたが、水彩畫はロンドン以外は殆んどゼロである殊に多少言語の解さるゝのは凡てに便利であるから明年の春までこゝに逗留して研究する事に決した、こゝに着いて今日で一週間である、大使館を尋ねたり、ロイヤルアカデミーとコロネーション展覽會を見物し、昨日キューの植物園に出かけた丈である。十年前の倫敦と今日の倫敦でどれだけの相違あると余に問ふ人あらば、大した相違を認めないと答ふる、只自動車の多

くなつた位だ。ロイヤルアカデミーの報告は次便にゆづる。

#### 松江にて

會場の入口には、水彩畫講習會といふ大文字の札が出てゐる、會員もよほど集まつたらしく、書生下駄や、鼻緒のなまめかしい女の駒下駄などが、二十足ばかり脱ぎ捨てゝある、新しい藁草履が縛つたまゝ、式臺に横はつてゐる。

右へ廊下をつき當つて、左へ最初の部屋が、男會員のため、其隣りは婦人會員のための休息所になつてゐて、其先は講師の室だ、中央に赤い裂けかゝつた卓があり、椅子が五六脚並んでゐる、卓上には尺大の岩付の松の盆栽が、涼しげに置れてゐる。

廊下を折れ曲ると、疊を敷いた廣い部屋がある、そこが講話室になつてゐる。

いつの間にか四五十人の會員は集まつた、髯の生へた嚴めしい先生らしい人もある、活潑氣な青年もある、無邪氣らしい少年も居る、髪の毛のダラリと下つた優き男も居れば、色の眞黒けな蠻骨も居る、廂髪の一帯は、隅の方に陣取つて静まり返つてゐる。やがて、講師の細くして丈け高き姿は、講壇の前に運ばれた、そして一わたり場内を見廻した、同時に一同の視線は、期せずして彼の身邊に集まつたのである。(塔江)